



人間に限らずこの世に「生」を受けたものはどんな形であれ「死」という終わりを迎えるのです。

母はB型肝炎、肝硬変、肝臓がんを患って最期を迎えました。

わたしを出産する際に輸血を行いその際にB型肝炎に感染しました。わたしが生まれた頃はそんな病気は未知だったので、特に輸血用血液の検査をすることもなく、感染したのです。

そのため母が入院をするようになってから患者さんを見ると多くが母の年代の人でした。

肝臓がんに限らず肝臓病の厄介なところは痛みを伴わないので静かに進行してしまうということでした。

いまでこそ肝炎治療の薬がでてきたものの病気とわかった20年前には母は既に「肝硬変」から「肝臓がん」に移行していたのです。

わたしの母に対する印象は「いつも横になっている人」でした。

今でこそあれは病気のせいだったかな、と思えますが当時はだらしない人としかわたしの目には映っていませんでした。

何度も入退院を繰り返し10数年闘病生活をしていました。

「がん告知」はしていませんでした。

入退院を繰り返すなか、外来に行くと母と同じ様に入退院を繰り返す患者さんと出会っては「XXさんが亡くなったんですって。」と耳にするのです。

それぞれが「その時」の順番を待つような心境になっていたのだらうと思います。

後日、母の遺品を整理していて、本棚におびただしい「がん克服」に関する書物をみたとき、「告知」して向き合って治療をしたほうがよかったのでは、と思いました。

その日々は真綿で首を絞められるような残酷なものだったと思います。

末期になったとき、家にいてもほとんど寝ているだけだったため、足腰が弱りふくらはぎの筋肉も痩せて、バスのステップも自力で上がれず後ろから押し上げてもらうほどでした。

人が老いや諦めを最も感じるのが「トイレ」がらみのことです。

母も「トイレに間に合わなかったの。」と少し恥ずかしげにそれを言ったのです。

それでも、紙おむつを使うことに長く抵抗していました。

「パッド使おうか。」そうやって生理用のナプキンを使うようにしました。

入退院のたびにおそらく母は、「次は帰って来るのかな」という思いで日々を暮らしていたと思います。

ある夏に暑い日、父と一緒に退院してきた母が玄関先の植木が枯れていたのを見て、

「わたしもこうなるんだ。」と言って号泣したといひます。

父はもともと家事が好きでわたしが子供のころには日曜の朝は父が朝食の準備をしていました。

料理の腕もおそらく母より上手かったと思います。

家事をすることは父にとってはごく自然のことだったので母が病でも父の生活が破綻したことはなかったのです。

当時わたしは仕事が忙しく看病を父一人にゆだねていました。

わたしは月に休みが2日ほどしかなかったため、入院中の母を見舞っても備え付けの椅子にどっかり座り、母の話をぼうっと聞いているだけでした。

わたしのほうが、「先に死ぬかもしれない」と何度も思ったほどです。

当時大部屋は母同様、入退院を繰り返している患者さんが多かったのですが、たまたま初めて「肝炎」で入院した患者さんがいて、事ある毎にその方が大騒ぎしていたのです。

母は抗がん剤の影響もあり副作用でいつもより多く毛が抜けることもあったのでしょうか。

それを見てその患者さんが大騒ぎをして母の心を苦しめました。

わたしの携帯電話に病院内の公衆電話から母が電話して来ました。

「かつら買ってきて。」

「なんで？」

「毛が抜けて恥ずかしいから。」

「そう、わかった。週末行くね。」

週末わたしは、母の病室に行き母の髪を見て、

「なに、全然抜けてないじゃない。ぼっそり抜けて地肌が見えてる程かと思ったら。もっと薄毛の人（病院の）外でいっぱい見かけるよ。」

母が小声で

「食堂に行きたい」とささやきました。

「わかった。」

二人で病室をでて廊下を歩いていると母が、

「あの病室いやなの。新しく入ってきた人がいろいろ言うの。」

食堂に行き、コーヒーを飲みながら母が

「わたしの毛が抜けるのを見て、大騒ぎするの。それにあんたがあまり見舞いに来ないって言うし。それぞれ事情があるのに。」

「あちらの娘さんは専業主婦だもんね。いくらでも来る時間は都合できるでしょう。カツラどうする。外出して一緒に買いにいこうか。」

「ううん、もういい。」

話をして少し落ち着いたらしくそれから髪の毛のことは言わなくなりました。

闘病の後半で母は「乳がん」が見つかりました。

検査が終わり、病名を婦人科の担当医が6人部屋の母のベッドに来て、ベッド周りのカーテンを引いた直後に

「乳がんです。手術しましょう。」と医師は母に告げたのです。

当然、病室のみんなに聞かれてしまいました。

その医師はアメリカで数多くの臨床経験があり、母のガンの位置が直接生命に影響しないと判った上で本人に告知したのだと思います。

でも母はそのことを怒っていました。告知されたことより、病室で他の患者さんに聞かれたことが嫌だったのです。

「告知」は患者にとっても医師にとってもとてもデリケートな問題だと思います。

告知してくださいといった患者が告知されて発作的に自殺するという最悪のこともあります。

乳がんの摘出後、母の手の甲にあったシミがなくなったのです。それを見て、わたしは母の手を取って、

「悪いもの取ったから、ほら、手のシミ消えたね。白くなったじゃん。よかったね。」と言いました。

「・・・」、母は安心した顔を見せ、うっすら笑っていました。

生物の体は常に細胞が再生と消滅を繰り返し、人間、猫といった具合にそれぞれ固有の形を作っています。若くても「がん細胞」は発生し、そして免疫力や様々なプロセスで死滅していきます。若くても免疫力が落ちていたり、「がん細胞」のほうがより活発に増殖して「がん」として発症するのです。

母に「がん告知」をしたのは結果的にわたしでした。

母の治療法を聞いて「がん治療」だといったのです。

それは、大腿部の血管から管を通して直接肝臓にエタノールを注入する方法でした。

「それってがんの治療ね。」

「えっ、そうなの。」

治療のときは、たぶん内視鏡を見ながら血管内の管を進めていくのでしょうか。

医師から「見ますか。」と聞かれたことがあると母が言っていました。

「見ません。」と断ったそうです。

母の治療の承諾は父がしていたため、わたしが直接医師から治療方法や進行状況を聞くことはなかったのです。

ある日、わたしは直接医師から説明を聞きたいと思い、夕方仕事を終わってから医師を待っていました。入れ違いで医師が病室に母を尋ねたため、母は医師が何か「特別なこと」を言うためにわたしを呼び出したと思ったようです。

その後、何度もどんな話を聞いたのかとわたしにしきりに訊ねていました。

当時フリーアナウンサーになっていた逸見政孝さんが「がん告知」をテレビ会見して、テレビでは様々ながん治療の最前線番組が流れていたのです。

母もそれらを見て自分の病状と照らし合わせて「がん」とわかっていたと思います。

それでも医師から告知されていない以上本人にとっては「がん」ではないのでしょうか。

最期は肝臓の大きさが握り拳大まで萎縮し、母の肝臓は全く機能しなくなりました。

肝臓は全ての貯蔵庫であり工場です。

休むことなく、体に入ってきたものを分解吸収し、全身に配分していくのです。

母の場合はB型肝炎から肝硬変、肝臓がんの行程を経ていました。

母は飲酒や喫煙はしていませんでしたが、太り気味だったせいもありダイエットと称して、キャベツと卵だけの炒め物ばかり食べていたり、と闘病中も偏った食事、間違った栄養補給をしていたと思います。

わたしが「バランスよく食べないと。」と言っても処方された薬以外にも滋養のよいとされるサプリメントも様々摂っていました。

それらも結果的には消耗しきった母の肝臓には負担だったと思います。

「休肝日」を、と言われるのはそういった働き続ける肝臓に負担を与えないようにということなのです。

治療のために使う「エタノール」は「99%アルコール」で治療用のものです。

「アルコールで洗浄しているんだ。」と言いつくをする方もいると思いますがくれぐれもご用心ください。

「休肝日」と平行して「休肝時間」も必要だと思います。

寝る前のアルコールや食事はやめましょうというのは、睡眠中は肝臓にとって「休憩時間」のためのものなのです。

母は亡くなる前日、わたしに

「足が痛いから、もんでちょうだい。」といました。

見ると、足が浮腫（むく）んでパンパンになっていたのです。

わたしは、ほとんど力を入れず、足先からゆっくりと鼠径部まで両足をさすっていきました。

「ああ、気持ちよかった。おとうさんのは力が強くて痛いのだ。」

(ぜいたくなこと言って)とわたしは内心思いましたが、やっている側は自分の好きな力の強さとなるとつつい強めになるのだなと思ったのです。そう言って気持ちよさそうに眠りました。

夕方近くに寝ている母が大きなイビキをしているのが聞こえてきました。

(おおきいなあ。)と感じて母のほうを見ました。(よっぽど疲れているんだな)と。

それは死の前の最期の呼吸だったのです。

その音を聞いたことのある人は「ああ、あれが。」と思い当たるとおもいます。

とにかく、それまで聞いたことのない、この世のものとは思えない、吠えるような声、というより音なのです。

そして母は翌日息を引き取りました。

夜中のうちに息を引き取っていたので父もわたしもその瞬間に立ち会ってはいなかったのです。

。

父は泣いていましたが、わたしは悲しくはなかったのです。

なぜならようやく長い闘病から母が解放されるんだと安堵したからでした。

遺影にする写真をアルバムから探そうとしたのですが不思議なことに最近の写真が一枚も見当たらないのです。

結局、遺影は若い頃のモノクロ写真でした。



## 2-1page

---

人間に限らずこの世に「生」を受けたものはどんな形であれ「死」という終わりを迎えるのです。

初めて直接立ち会ったのは、伯父でした。

既に医師から「胃がん余命1年」といわれ、それでも伯父は生き抜きたいと手術を受けました

。

術後の医師の説明と共に摘出した臓器を見せられてわたしは愕然としました。

伯父の胃がんは胃内部表層ではなく次の層であったために発見が遅れてしまったのです。

手術の際、脾臓は摘出されました。

大きく腫上がった印象だったのでわたしは思わず「それ、腎臓ですか。」と担当医に尋ねてしまったほどです。

摘出したのは、胃全部、脾臓、肝臓1 / 3でした。

ここまでして生きなければいけないのかとわたしは思いました。

異常に初めて気づいたのは手術からさかのぼること一年前のことでした。

既に定年していたのですが、技師として現役時代も会社から何度も技能優秀賞など数多くの表彰を受けていた伯父はシルバー枠で現役と同じ職場で週3日働いていたのです。

例年行われる定期健診の血液検査で異常が見つかりました。

しかしその後、MRIやレントゲンなど様々な検査を行いました。原因を発見できませんでした。

今ならセカンドオピニオンとして第2、第3の病院で検査を受けるのですが、伯父は会社の系列の病院ということもあり、何の疑いもなく、1つの病院に通っていたのです。不調のまま、1年が過ぎました。

そして、その日は来ました。

病院から電話があり検査の結果を伯父が直接聞いたのです。そのことが善かったのか悪かったのかは判りませんが、

「胃の細胞検査の結果、腫瘍とわかりました。」

血液の赤血球異常があったのは、脾臓が一年前に悲鳴をあげていたからでした。

脾臓の役割はリンパ球の産生、免疫抗体の産生と血液のろ過作用、そして古くなった赤血球を代謝します。

それから伯父は術後半年間、死ぬまで病院のベッドで余命を過ごしたのです。

既に1年以上もがんを抱えていた伯父に術後の体力は残されていませんでした。

伯父は術後3ヵ月後に呼吸困難に陥りました。

その際、医師が肺のレントゲンを見せながら、説明をしてくれました。

伯父は、長年鶴見の日本鋼管造船所に勤務していました。

その頃日本は高度成長のなか、そこは公害という不の成長もあったのです。

伯父の肺は既に公害で半分が侵され、喘息の持病も抱えていました。

そのため、術後の体力低下と寝たきりの体位で肺の機能はレントゲンを見せられたとわずか1／3しか機能していなかったのです。

普通の人間だったら既に意識不明なのですが、伯父は長い時間をかけてその肺と付き合いきたため、体がその不便さに順応していたのです。

そのとき伯母がぼつりと言ったのです。

「循環器の先生は手術はできないって言ったんだ。でも外科の先生ができるって言ったから。おとうさんが（手術）やるって言ったの。」

わたしはそれを聞いて伯母に言ったのです。

「そりゃあ、外科の先生はやれるって言うよ。やりたいもの。これだけだめになっている体にメスを入れてどれだけ生きるか見てみたいさ。その記録は彼らの勲章だもの。」

怒りがこみ上げてきました。

「もし、わたしが子供だったら、二人で好きな温泉でも行って残りの時間を楽しんでほしかった。」

伯父と伯母には子供がいなかったため、常に二人で時間を過ごし、ふたりで支え合って生きてきたのです。

肺機能がいよいよだめになって、酸素吸入をつけ、それからは会話もほとんどできず、痰（たん）取りとのと戦いでした。

強い鎮痛剤に抗がん剤でほとんど寝ていたせいのためか、伯父は不思議と「痛い」ということを言わなかったのです。

伯父の意識が完全になくなる前日のことでした。

伯母は夕飯を作りに家に戻っていて個室に伯父とわたしだけだったときのことでした。

伯父がぼつりと、

「今日、これからちょっと家に戻りたいんだ。連れて行ってくれ。」といったのです。

「そうしたいのは、やまやまだけど、外はすごい雨なの。ごめんね。明日なら、車椅子に乗せて連れて行くから。」とわたしは答えました。

伯父の家は病院から歩いて5分ほどのところだったので帰ろうと思えば簡単だったのです。

「今日帰りたいんだ。」と言って伯父が怒り出しました。

「だって、雨に濡れて肺炎にでもなったら大変だよ。明日連れて行く。約束するから。」

そう言うと、伯父は諦めたように黙って天井を見つめていました。

そして翌日から伯父は意識不明になったのです。自分の終わりをわかっていたのでしょうか。

最後の日、親戚一同が病室に集まって伯父の臨終を看取りました。

その前にわたしは伯父に向かって

「伯母さんにありがとうって言わなきゃ。」と言いました。

吸入器をつけたまま、伯父は声にならないまま小さく口を動かして

「ありがとう。」と伯母に言って息を引き取りました。

### 3-1page

---

人間に限らずこの世に「生」を受けたものはどんな形であれ「死」という終わりを迎えるのです。

40代には胃潰瘍、50代には大腸ポリープと父は祖父の胃系の病気、祖母の大腸系の病気を両方患っていました。

そして70代には、大腸がんになったのです。大腸ポリープとは関係ないとのことでしたが発症したのは以前手術をした場所の近くでした。

がんセンターでの入院ということもあり、本人と一緒に全てレントゲンやMRIを見ながら担当医の説明を受けたときも父は淡々と説明に耳を傾けていました。

父は母が亡くなってからは、愛犬と一緒に暮らしていました。

母が亡くなって1年後に父は犬を飼い始めましたが、わたしは既に父が高齢者の域にあったこともあり、

「お父さんが病気になったとき、どうするの。

わたしは犬を飼えないよ。」と言うと、

「大丈夫だ。」と言って、柴犬の幼犬を飼い始めたのでした。

結果として、父にとっては面倒を見る対象ができたことで規則正しい生活をする事ができたのだと思います。

そのころには、母の看病中出来なかった旅行も町内の老人会の人々と行く楽しみも覚えていました。

父に告げるとうなだれた顔をあげ、

「そうだな。」と父は自分自身に言い聞かせるように強い口調で言っていました。

(まあ、切り替えのはやいこと)と、その変わり様に少し呆れました。

それからは何種類かの抗がん剤をブレンドする俗に言うところのカクテル療法が始まりました。

左肩にカテーテル用の器具を入れるため、簡単な手術をしました。

手術の際は、同意書の項目の中に「摘出した組織を研究のため提供します」という欄がありました。

わたしが内容を読み上げ、項目の一つ一つにチェックを入れました。

父は組織提供の欄は「同意しない」サインをしました。

わたしは自分自身の体全部を使ってほしいと考えていたので、父が同意しなかったことに少し違和感を覚えました。

カクテル療法は数種類の抗がん剤を混合し、数回繰り返して様子を見ながらマッチングする抗がん剤を探していく方法です。

初めのブレンドを3回投与した後、父は副作用で激しい下痢に悩まされて、結局このカクテル療法を中断しました。

しばらくして体力が回復して2番目のカクテル療法に入りました。

それもまた3回目を過ぎたころに激しい副作用に父は苦しめられました。

そこで、わたしは父に提案しました。

「ねえ、おとうさん。こんな苦しんで寝ている時間のほうが多いし、我慢しながら抗がん剤治療を受けても、これから何十年も生きられるわけじゃないから。カクテル療法をやめて飲み薬だけにして普通の生活が出来るようにしてマルとのんびり過ごしたほうがいいんじゃないかな。」

父はしばらく考えていましたがぽつりと

「そうする。」と同意しました。

それかからは抗がん剤と激しい痛みを和らげる赤い袋にはいった鎮痛剤を飲むようになりました。

父とわたしは父の手術後、重いがんであることがわかったとき、今後のことを話し合いました。

一人でなんでもきちんと家事をしていた父には基本的にわたしのサポートは必要としていませんでした。

ただ介護手当てで週に数回公的サポートをうけて買い物を手伝っていただいていた。

「おとうさんはわたしが身の回りのこと面倒見たほうがいい？」と訊ねると、

「自分でやりたいんだ。」と父は答えて、自立を希望しました。

父にとって家事全般を自分でやるということが生きていくという証だったのです。

カクテル療法をやめてしばらくしたとき、週末に父を尋ねるとどこかぼうっと心ここにあらずといった感じでした。

ふと、思い当たるところがあったので父に薬のことを訊ねました。

「おとうさん、お薬どうやって飲んでるのか教えて。」

父は薬袋から薬を取り出して、わたしに説明し始めました。

すると、激しい痛みのときに飲む「赤い袋」の薬を毎食後飲んでると説明したのです。

「おとうさん、今ぼうっとしてるでしょ。それはね、この赤い薬を毎食後に飲んでるからなの。これは痛いときだけ飲む薬よ。わかる？」

父はぼうっとしながら、わたしに視線を合わせて

「そうか。なんか頭がぼうっとするなと思ったんだ。」と答えました。

「気をつけてね。このお薬はとても強い薬だから。」

「うん、わかった。」とわたしの説明を何度もうなずきながら聞いていました。

それからは間違えずに薬を飲んで体調もいくぶんよくなっていきました。

しかし、それから数ヵ月後に父に衝撃的な出来事がおきたのでした。

ある日、散歩をしようと愛犬の首にリードをつないで父がリードを引っ張っても犬がビクとも動かなかったのです。

父はぽつりと、

「この前マルと一緒に散歩に行こうと思ったら、断られちゃったんだ。ビクとも動かないんだよ。」と苦笑していました。

その頃の父はかなり体力が落ちていて、一緒に坂道の多い散歩の行程は無理と愛犬に判定されてしまったのでした。

父にとっては娘であるわたしなど及ばないほど愛犬が父に寄り添っていたのでした。

亡くなる年の初めころ、父の右肩にピンポン玉くらいの大きさのこぶのようなかたまりが3つできていました。

父と一緒に外来に行ったとき事でした。

医師の前でわたしは、

「これって。」と医師のほうをみると、

「そうです。」と強い視線を向けて医師が答えました。

それは大きくなったがん細胞がリンパを通過していくのを目にしたのでした。

数日すると、そのこぶは無くなっていました。

まもなく、肺や他の臓器にも確実に転移していく印ということをわたしはわかっていました。



亡くなる1ヶ月ほど前に父のがんは脊椎まで転移しました。すると、突然歩けなくなったのです。

救急車を呼んでがんセンターに行くつもりだったのですが、夜だったため担当医がいないのと空きベッドがなかったために別の救急病院に父は入院することになったのでした。

父は何度か入院をしたものの必ず自分で病院内のコインランドリーに行って自分の着るものを洗濯をしていたのです。どんなときも決してわたしに洗濯を頼んだことはありませんでした。

歩けなくなって、入院した数日後わたしが父に、

「これもって帰るね。こっちは新しい着替え。」とわたしが告げると、

「えっ。」と父はびっくりした顔をしていました。

それは、これからは父の身の回りをわたしがするということを意味していました。

その日の夜、父は歩けない、自由の利かないはずの体でベッドから起き上がり「帰るんだ」と暴れたそうです。

それを翌日看護師から聞いて、人間の意志の強さに驚かされました。

父の「帰りたい」一心の思いが切断されたはずの神経に一時的に信号が通じたのだと思います

。

父が入院した救急病院は人手が足りないこともあり、いままで父ががんセンターで受けていた看護とは大きく違っていたのです。

腎機能も落ちていたし、歩行もできなくなっていた父の足を入院して数日後に見たとき、絶句しました。

靴下を履かせていたのですがそれを取ると、指先が腫れ上がり赤紫に変色していたのです。壊死してしまうと、わたしはあわてて父の足指からマッサージを始めました。

投薬のせいでほとんど意識が無くなっていた父はわたしが足を擦っているのに全く気づいていない様子でした。

擦り始めて膝裏を擦ってしばらくすると、すうっと腫れが引いて鬱血している足指が健康な肌の色にもどったのです。

ごめんねと思いながら、入院先で使う投薬をもらうために翌日わたしはがんセンターを訪れました。

そして、担当医に

「たとえ一日でもいいんです。父はここに来たいと申しているのです、お願いします。」と依頼しました。

「緩和病棟には入れないけど、いいの？」

「はい、とにかく、毎日こっちにまだいけないの？と父が言っていますので。」

「わかった。できるだけ早く入院できるようにするから。」と、担当医は言ってくれました。

転院前に病院長から現在の病状をレントゲンを見ながら説明を受けました。

「脊椎はこの部分は崩れていますがセメントで固めれば自分で座れるようになりますよ。」と病院長に言われて、わたしは言葉を失いました。

歩くことも出来ず、座りっきりの生活に父が耐えられるとは到底思えなかったからです。

こんなことをいう医師もいるんだなと思い、担当する医師や病院によって患者や家族の心が揺さぶられたり、安心したりするのだということを実感しました。

転院後の父はほっとしたように、いつも通りに看護師の方々に心を許して治療を受けていました。

転院直後に着替えをしてくれた看護師たちが「背中に褥瘡（じょくそう：床ずれ）ができています。痛かったね。」と言って塗り薬つけてくれました。

人手が足りなかった転院前の病院ではおそらく、定期的な寝返りはしてくれなかったのだでしょう。

緩和病棟よりも手当てが行き届かないと言って看護師の方々は「ごめんね。」とおっしゃってくれました。

転院後、父は一般病棟の個室で残りの時間を過ごしました。

鎮痛剤の副作用で幻覚を見たり、悪夢を見ていたためか父はあまり熟睡ができなかったようでした。

さまざまな機器と管でつながれていたため、父は

「こんな生きてることにならない。」そう言って泣いたのです。

「何がそんなに悲しいの。自分で身の回りのことが出来ないから。」

「そう。」、そう言って悲しげに繋がれた機器を眺めていました。

亡くなる数日前に、担当医からいまの処置の方法の説明を受けました。

「鎮静剤を点滴してるんだけど、意識がはっきりしてるんだよね。」と医師は言いました。

亡くなる数日前に、担当医からいまの処置の方法の説明を受けました。

「鎮静剤を点滴してるんだけど、意識がはっきりしてるんだよね。」と医師は言いました。

出来るだけ最期を意識させないために眠らせてあげたいとの配慮だったのですが、父の場合は、逆に幻覚や夢を見るのが怖くて覚醒していたのでした。

「今日の午前中に病室に行ったら、お父さんに（お世話になりました）と言われちゃって。」と、担当医が（参ったな）という表情で苦笑しながら話してくれました。

「こちらに転院できて父は喜んでましたから。こちらに来てから顔色が明るくなって。本当に幸せだと思います。」とわたしは答えました。

そのとき、わたしは母の闘病生活に比べると、父は環境もお世話になった方々も本当に恵まれていたと感じたのです。

伯父の最期のときと同じように亡くなる前日に父が、  
「今日帰りたい。一日でいいから。」とわたしに懇願しました。

その日の朝、見舞いに来ていた従兄が看護師に  
「連れていけませんかね。わたしが車で運びますから。」  
「それはできません。容態が急変したとき手当てができませんから。」と看護師に断られたのです。

父が住んでいる家は玄関先が狭い階段で出来ていて到底車椅子で帰ることは出来ませんでした。

それにも増して、そのとき病院側から、「必ず誰かが院内に常駐してください」と言われているほど父の病状が悪かったのです。

従兄は看護師に父の一時帰宅を断られると、帰っていきました。

「終わりにしたいんだ。どうすればいいんだ。」と父は看護師の前でわたしに問いかけるのです。

わたしは、父に向かって冷静に答えました。

「あのね。おとうさん。寿命があるまで生きないといけないの。ほら、おとうさんが吸入器を自分で外しても息できるでしょ。先生や看護師の方もわたしも終わるのを手伝えないの。わかる？」

それを聞いていた看護師がびっくりしていました。

父は黙ってわたしの言葉を聴いていました。

わたしは父にとってここは最高の環境だと思っていました。

時々父が幻覚を見て、分けのわからないことを叫ぶようになっていたので、防音効果の高いドアを日中も締め切るようになりました。

薬やカテーテルで排出される尿などの匂いもあり廊下から個室に入ると独特の臭いでむせ返りました。

その頃、学び始めていたアロマセラピーのティートリーとオレンジの香りを使って病室の消臭を施し、家から静かな曲のCDを持ってきて音楽も流しました。

すると、病室のドアを開ける看護師の方たちが、

「わあ、この部屋いい香り。癒される。」と言ってくれたのです。

医師や看護師の方たちを見ていると、「この人たちはいったいこのストレスをどのように解消しているのだろう。」といつも感じるのです。

患者側は当たり前ですがそれに対する医療の方々の心身のストレスが大きさは計り知れません

。

多くの患者が生還することなく、力尽きてしまうことを目の当たりに見続けるのです。

「どうしたらいいんだ。終わらせたいんだ。」と言う父にわたしは、  
「そしたら、少し寝てみようか。そしたら少しは楽になるんじゃないかな。」と言うと、  
「じゃあ、試してみるか。」と父は言って目を閉じました。  
(お試しはないとおもうんだけど)とわたしは思いながら、静かに父が眠っているのを眺めていました。

その日の真夜中、日付が変わってももなく父は息を引き取りました。

地下の出入り口から葬儀社のもって来たキャスターに乗って我が家に父は戻りました。

その日の夕方、父は最後の入浴を葬儀社の方に頭の先からそれこそ足の先まできれいに洗っていただきました。

その姿はまるで眠るようにお湯に温められてほんのり赤みをおびたように感じました。

棺を閉じる前に、愛犬を父の顔に近づけても顔をそむけ父のほうを見ようとしません。悲しそうな表情もなく、ただ静かにしていました。父の死をわかっていたかどうかは分かりませんでした。

いかに生きるかもとても大事ですが、どのような最期を迎えたいのか、その日が決まったとき残された日々をどのように過ごしたいのかがとても大切だと感じます。

たとえ、その日がいつごろなのかわからなくてもその日が来たとき、慌てないように準備をする必要があるとおもいます。

父の遺品の整理をしていたとき、父の昔のアルバムも母のアルバムもわたしの子供のころのアルバムもありませんでした。

父が全部処分してしまっていたのです。

ただ一枚、タンスの中から母の白無垢の白黒写真が出てきました。